

「病院のなかの英会話」第2版

みさと健和病院皮膚科医長 庄司 道子
 済生会中央病院内科部長 北原 光夫 著
 追手門学院大学教授・文学部 Jeffrey Herrick

日本医科大学助教授・医療管理学教室

高 柳 和 江

とても可愛い本である。赤表紙もポケットサイズも、ぶ厚さも可愛い。思わず手にとってみたくなる。パラパラとめくってみる。イラストもいい。これは、何の本だ？ 外国人が病院に来たときのために、病院職員が勉強する英会話の本であるという。暖かい発想の本である。日本で病気になるだけでもストレスなのに、更に行った先の病院で、言葉が通じないことが多い。もともと日本の病院は、日本人でさえ、わかりにくい所である。言葉の通じない外国人にとっては、これが更にストレスとなり、不安が増幅する。これをすべてとはいかないが、クリアしようとする暖かい本が本書なのである。

内容は、項目ごとに分かれていて、受付や、外来診察室や、レントゲン室など、ここぞと思う関係部署の英会話を勉強することができる。この英会話は平易である。これは、とても大切である。第1に学ぶ者にとって簡単で、覚えやすい。第2に、聞く方にとって、ポイントがわかって理解しやすい。“上を脱いでみせて

ください”のほうが、“今から診察しますから、上から全部脱いで下さいね。腰から上全部ハダカになるようにね”なんて言うより外国人にとっては理解しやすい。更に言えば、“Do not you mind to remove your shirt? (シャツをお脱ぎ下さい)”って、最敬礼のジャパニーズイングリッシュで言われると、相手は“???”であるが、“服を脱いで (Remove your shirt)”と笑顔で単純に言われたほうが、わかりやすい。特に英語を母国語としない外国人は、英語が堪能とは限らないのである。この意味で、簡潔なこの本の英語は非常によい。

この本を読んでいると日本の医療文化がうかがえる。例えば“どうも、すみません、医師が薬を出し忘れたようで”なんて、ドキッとする文章がある。どうも、医師という人種は、薬を出し忘れることが多い人種のようだ。医療イコール薬をもらうという単純図式をもっている一般人は、ドキッとさせられる。何のために医師の元に行ったのか。“化膿止めを出しておきましたから”の日本語は、

英文では、“抗生物質が出ています”となっている。インフォームド・コンセントが叫ばれているわりには、一般的に、日本人々は“化膿止め”で納得し(させられ)、外国人は、抗生物質と言わないと、納得しないらしい。外国人には、抗生物質と言っても、アンピシリンかセファロスポリンかまで知りたがる人もいる。“痛”は、英語の教科書で習う“pain”ではなく、一般口語の“hurt”という言葉が使われているなど、実用に即した好書である。

更に言うなら、不安の固まりの患者さんを“安心させる言葉集”、“声かけ集”がもう少しあればよいな、と思われる。もっともこんな要望をつければ、どんどん本書はぶ厚くなり、ポケットに入りきらないか、この本を入れるために特別製の特大ポケット付き白衣をあつらえねばならないのかもしれない。

実用書、医療文化比較、etc, いろんな面で、楽しく読める好書、一般読者にもぜひお勧めしたい。

● B6 変型 頁 184 図 32 1994
 定価 1,648 円(税込) 〒400

医学書院 刊 (☎ 03-3817-5657)